
IS 『に』 転生ってふざけんな！

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS『に』転生ってふざけんな！

【Nコード】

N4278Z

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

この物語は、主人公が福音に転生して様々な困難に操縦者のナターシャと共に立ち向かっていく断である。

第1話（前書き）

完全なる思いつきです。連載という判断で大丈夫か・・・？

第1話

気付くと、俺は真つ暗な空間にただ1人いた。

(なんだ……ここは……？夢の世界ってヤツか？)

「ここはあなたの処刑場です」

女性の声が聞こえた。　　つてちよつと待て！

(なんだよ処刑場って！　ていうかあんた誰だ！？　あれ？声が出ない……)

「私は神様です。ここではあなたは魂だけの存在なので声は出ません」

(ああ、なんだそういう事か……つて納得できるか!!)

「五月蠅いですよ」

神様(自称)は冷たい声でそう言った。

「まず説明しなければなりませんね。人の寿命は、その人が生前犯した罪によつて減つていきます」

(あ、ひよつとしてそつちの手違いでまだ死なない俺を殺しちやつたからどっかの世界に転生させてくれるとか……つて俺死ん

だの!?)

「そうです。あなたは死んだんです。あと、私たちは手違いなんてしません。なんせ全知全能ですからミスなんてあるはず無いのです」

(おおつふ・・・じゃあ、なんで俺ここにいるの?)

「あなたは小学生の時、同じクラスの子からゲームを借りたまま返しませんでしたね?」

(・・・・・・・・)

「さらにあなたは別の子から借りたマンガを返さなかったり、アンティールルで決闘デュエルしたりしましたね」

(・・・・・・・・はい・・・・・・・・)

「さらにあなたは物心ついた頃からつまみ食いをし続けていましたね」

(ちよっと待ってくれ! そんな程度で寿命削られてたのか!?)

「そうですね。積もりに積もった小さな犯罪が実を結んで、こうして10代でめでたくぽっくり逝く事になってしまいましたね(笑)」

(笑)じゃねえ!!何が悲しくて17で死ななきゃならなかったんだよチクシヨウ!)

「あ、一応言っておきますけど、あなたは本当は13歳で死ぬことになってました」

(なお酷いわ!! ……っ、おい。それはどういう事だ?)

「あなたは非常識なほど悪運が強かったので、何度も死神が迎えに行きましたがあなたが死ぬことはありませんでした。なので私が直接手を下す事になったのです」

(……俺って、何度も死神に迎えにいられてたんだ……)

「つたく、役立たずが……。それで、私が直接人の生死に手を出す事はあまり望ましくない事なので、その処置としてあなたをどこか適当な世界に転生させます」

(今、神様が真っ黒になった気が……。っーかこれ、棚ボタなんじゃないか?)

「あなたが思っているほど楽な世界なんてありませんよ。それじゃあせめて行く世界くらいは選ばせてあげましょうか」

(ならISの世界で!ちゃんとIS動かせるようにしてくれよ!)

「誰が貴様のようなゴミ虫の言う事なんか聞くか」

(……あれ?なんかキャラ変わってない?)

「ごたごた五月蠅い! ISですね! それでは逝ってらっしゃい」

(字違う!! ……あれ……なんだか意識が遠のいていく)

(……あれ？　ここはどこだ？)
俺が意識を取り戻すと、目の前には何台もの機械と大勢の研究者が忙しそうにしていた。

(あ、まさか俺、ここの研究者にでも憑依転生したのか？それにしても、ここの研究者は外人ばっかだな。外国語なんて何も出来ないぞ、俺)

などと考えていたら、俺の方に向かって金髪の20歳くらいのすげー綺麗な女性が歩いてきた。服装はレオタードのような格好をしている。おそらくアレがISスーツだろう。

(……ってちょっと待て！あの人なんで俺の方に来てるんだ！？まさか俺の事が好きなんじゃないだろうか!!！)
その時、俺は気付いた。『俺、さっきから声出してなくね？』と。

そして目の前の女性は……3巻末と6巻の初めに出てきたナターシャさんじゃないか！

まさか・・・まさかとは思うが・・・俺、ちゃんと人間に転生してますよね、神様ア！！

「これからよろしくね、シルバリオ・ユスベル『銀の福音』」

やっぱりかああああい！！！！

第1話（後書き）

ウザい主人公ですいません……。

ナターシャは福音の事を「あの子」としか呼んでいなかったのも、最後の方は悩みました。悩んだ結果がアレですが……。

「なんでナターシャが日本語で挨拶しているの？」という質問には、担当者が不在のためコメントできません。

下らない文章になるでしょうが、応援よろしくお願いします。

第2話(前書き)

「作者でーす」

神「神でーす」

「とゆるワケで、今作の前書き後書きは私達2人が進行させていた
ただきまーす」

神「よく神界まで来れたな」

「ほら、作者って言ってみれば神様より上じゃん。言ってみれば
界王様じゃん。だからフツーに来れるんだよ」

神「あ、そ」

「反応薄いなー」

神「じゃあ今回は主人公の生前犯した罪について、まだ書いてな
かった細かいところも説明してさしあげましょう」

「でたよ、上から目線」

神「d m r k s。彼は1話で述べた他に、授業中にマリカしていた
りモンハンしていたりしていた」

「みんなもよくやってるよね」

神「黙れ喋るな息をするな。他にも小2の頃から菓子パンやお菓子
を持ちこんで早弁していた。中1の時は弁当だったので、早弁用の
弁当を持って来ていた始末だ」

「そりゃすごい」

神「あとは・・・昼休みに決闘デュエルしていた」

「私もやってますよ、ソレ」

神「さらに小1の時『お菓子あげるからついておいでよ』と知らな
い大人から声をかけられた時に、鼻で笑いながら『今時そんなのじ
ゃ2歳児でもついてこねエよハゲ。警察に突き出されなくなかつた
ら財布を置いてさっさと消えな』と言い放つたり」

「それはひどい・・・」

神「他にも余罪はあるが・・・あまり長くするのもなんだ。これ

「うん、おれは」
「そだね。では本編をどうぞ」

第2話

(これ、終わったんじゃない?)

俺はまずそう思った。本当なら頭を抱えて絶叫して、なにか硬い物に頭部をぶつけてしまいたい衝動に駆られているのだが、なんせ手足が動かない。ついでに言うと口もきけない。なにこのプレイ。誰得?

「これからよろしくね、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』」
俺得でしたw。

(キタだろコレ!)

目の前にいるのは福音の操縦者のナターシャ・ファイルスさん。アニメで出てこなかったのが悔やまれる、挿絵で見た時「なんで2組の鈴がいてラウラがないの?」と思いながらも「なにこの新キャラのまさかのハーレム乱入」とかずっと考えて6巻で再登場した時にテンション上がった俺の好きだったキャラだ。リアルで見るとすっげー美人。

まあとどのつまり、何が言いたいのかということ・・・今、彼女はISSスーツを身につけている。という事は、今からISSに乗ったりするわけだ。

そのISSが何かって? 決まっているだろうこの俺、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』だ!

つまり彼女のナイス・ボディに俺が隙間無くくっつくわけで・・・
・ヤバい。考えただけで鼻血が・・・あ、鼻無いんだっけ。ついでに血も通ってないわ。

(いや、そんなブルツクみたいなたを一人でやってんじゃねえよ！)

などと俺が至極どーでもいいことばかり考えて興奮していると、ナターシャさんは俺の頭？の部分に優しく手をかざした。

「・・・・・・・・？」

「どうかしましたか、ファイルス？」
研究者の1人がナターシャさんに尋ねたが、ナターシャさんは「いえ。何でもないわ」と答えた。

・・・・・・・・つーか、英語で喋ってるんだよな。なのに普通にわかってるぞ、俺。やっぱりISになったから頭の方も良くなってるのかもしれない。

「(気のせいかしら・・・・・・・・。いつもとISの反応が違うような気が・・・・・・・・)」

初期化と最適化が終って気付いたのだが……ISの装甲には、俺の感覚というものが通っていなかった……。

どういう事かというところ、俺は初め、ナターシャさんの身体に密着するということに対して興奮していたのだ。福音は装甲部分が結構多いから、ほとんど全身を同時に触っていられるという変態的思考で考えていたのだ。

だが現実には違った。

ISの装甲部分に感覚が無いという事は、触っている感触もクソも無いのだ。ただ意識だけがISの中にある。今の俺はそういう状態なのだ。

(期待した俺が……馬鹿だった)
心底俺はそう思った。

「ファイルス、調子はどうか？」
オペレーターの女性がナターシャさんに訊く。

「うーん……なにか、違和感を感じるのよ。まるで誰かが私のすぐ近くにいるような……」

当たらずも遠からずです、ナターシャさん。俺がその誰かです。福音です。

「まだ一次移行もできてないし……チーフ、一度コアをリセットするべきではないでしょうか」
ファースト・シフト

（……は！？ ちよつと待ってくれ！ もしコアがリセットされたら、俺はどうなるんだ！？ このまま何もせずにナターシャさんを間近で見られてお終いか！？ あ、冥土の土産に丁度いいかも……ってそうじゃない！ せつかくなんだからこのままシヤルやラウラたちとも会わせてくれよ！ 臨海学校編ですよ！）

ISには、意識と似たような物がある……そう言ったのは、たしか山田先生だ。

その意識が俺だとしたら、コアのリセットは俺の消失に繋がりがねない。だから一刻も早く俺はナターシャさんの専用機にならなければならぬんだ！

（がんばれ俺！ やればできる！ どう頑張ればいいのかわかんねエけど！）

とりあえず一次移行が終了するようにと俺をこんなのにした誰かさんに祈りを捧げると……

『フォーマット 初期化と最適化フィッティングが終了しました。確認ボタンを押して下さい』

ディスプレイにそう映し出されたのが解った。

「っえ！ さっきまで両方とも進行度がたった3パーセントだったのに……!?!?」

そんなバカな。あれからけっこう時間経ってたぞ。なのに3パーセントおかしいだろ。機械壊れてるんじゃないか？

「まあいいわ。それより、一次移行が済んだんだから早くテストを始めましょう」

ナターシャさんは研究員に向かってそう言った。

(ん？テストって……?)

俺がその疑問に気付いたまさにその時、目の前のシャッターが上がり、奥の戦闘スペースと思われる東京ドーム何個分かの広さの楕円形のスペースが姿を現した。

(これは……ISのバトルフィールドか……?)

アニメで見たアリーナの地形と酷似しているその中に、ナターシャさんは迷い無く俺を連れて行く。

今で解ったが……どうやら、福音の操縦はナターシャさんによるそれが優先されるようだ。つまり、俺の意志は在って無いようなモノ、か……。なんだか悲しいな。

(まあでも、間近でISの戦闘が見られると思えば、少しは気も楽になるってか)

俺はISはアニメから入った。2話目を観て、すぐに原作を買った。

その理由は、アニメで観たISの戦闘シーンがすごく面白かったからだ。原作には軽く失望したが……。

キャラも可愛かったから好きだが……やっぱり、俺の中では戦闘が一番だ。

だから別に、俺自身が戦闘に参加できなくても構わない。すぐそばでアメリカトップクラスの操縦者の戦闘が観戦料タダで見続けられるんだ。こんないい話はそう落ちてないねきっと。

……はい。強がりです。自分も専用機持ってこの大空に翼を広げ飛んで行きたいです。翼をください。屋内なので大空は見えませんが。あと翼はもうありますが。まだ二次移行してないから機械つぽい多方向推進装置ですけど。
マルチスラスター

とかなんとか考えてる間に、俺とナターシャさんの正面にネイビーカラーのIS アレは、フランスの第2世代型の、ラファール・リヴァイブか が現れた。

（まさか、いきなり実践っていうヤツじゃ……ないわけないか）
思えば一夏もそうだった。いきなり代表候補生のセシリアとタイムンで闘うという無謀な挑戦だった。

だが俺は一夏の二歩三歩先に行く！ なんて言っただって、こっちは専門的知識すら単語一つも理解してないどころか見てすらいないんだからな！

（とか何とか言っても、ただ見てるだけなんですけどね）

向こうは第2世代型だから多分一瞬で勝負が着くかな、と俺が思っていた時だった。

リヴァイブがアサルトライフルのロックを外したのが伝わって来た。これは撃たれるな。

だがこっちの操縦者はアメリカで最強のIS操縦者の1人だ。さらにこの福音は高機動と高火力を兼ね備えた機体だ。

こんな牽制なんて華麗に避けて迎撃する間もなく反撃してくれるに
違い

バカアアアンツ！

バリアー貫通、ダメージ89。 シールドエネルギー残量、911。
実体ダメージ、レベル中。

（痛てエ！！？ なんだコレ！？ 感覚ないクセに痛覚だけあんの
かよ！！！）
俺は脚部に感じた痛みに戸惑いながら、なぜナターシャさんが避け
なかったのかを即座に考えていた。これもISになったお陰なのか
？すぐに最善の判断ができるんだけど。

で、その結果浮かんできた仮説が……『俺の動く意志に比
例して、ナターシャさんの反応が福音へ伝わりやすくなったり伝わ
りにくくなったりする』というのが真っ先に浮かんだ。

（ちょっと待ってくれ！ 俺は戦闘訓練なんて全くやって無い、ズ
ブの素人なんですけど!?!?）

あと、今の俺は福音に搭載されているハイパーセンサーで全方位が
視覚として認識できるんだけど、研究者の皆さんがなにやら不穏な
動きを見せてるんですけど……。

（まさか、コアのリセットか福音オレの廃棄処分についての判断じゃな
いだろうな……!!?!?）

第2話（後書き）

「おっと、まさかの3話目で完結か？」

神「いやさすがにそれは……」

「そういえば、彼がなにかあなたに祈ってましたけど、何かしたんですか？」

神「特に何も。やろうと思えば何でもできるけど」

「……それにしても、このままだとホントに次で連載終了すんじゃないか？」

神「大丈夫だろ。ドラゴンボールの悟空や悟飯だって何度も死にかけてるのに、蓋を開けてみれば死んだのは悟空が2回だけじゃないか」

「身も蓋もない事言うなよ。盛り上がらないだろ」

神「そういう発言は控えるよ」

続く

第3話（前書き）

「今日は寒かった」

神「唐突だな」

「関係無いけど、部屋でストーブ点けてさあ執筆だ、と思ったらマウスの電池が切れてたり」

神「ふむふむ」

「かと思つたら、実はマウスの電源がオフになってただけだった」

神「残念なヤツだな」

「まあ雑談はこれくらいにして本編始めますか」

神「本当に終わつたら面白いんだけど」

第3話

(考える！　なんとかしてこの圧倒的なまでの危機的状況を打破するんだッ！！)

このまま死ぬのはまっぴらご免だ。だつてせっかくナターシャさんと会えたんだもん。このまま近くにいたら風呂場とかまで一緒に持つて行つてくれ・・・じゃない。ISの戦闘を直で感じられないじゃないか！！

(やっつてやる！　やるしかないんだ！！)

「(どっぴいっ事なの・・・！？　福音が私の動きに全くついていない！)」

私は、今までとのISとは全く違う福音に戸惑っていた。

そもそも、この『銀の福音』シルバリオ・ユスベルは国際条約違反の軍用IS。前まで操縦していた量産型や競技用のISとは少し勝手が違うとは思っていたけど……ここまで違うものなのとは思っていなかった。

ハイパーセンサーによる視覚補正で、研究所の職員が信じられないという顔で私を、福音を見つめていた。やっぱり、あの人達にも想定外の事なのね。

「（ここは一度引き上げて、検査してからもう一回テストするのが賢明ね……）」
私がテストを中断しようと、通信回線を開こうとした時
微かに、声のようなものが耳に入った。

いえ、そうじゃない。耳で聞いたんじゃない、もっとこう……『感じた』とでも表現するべきな感覚。

「（まさか……でも、他に考えられない）」

ISには意識と似たようなものがあり、IS側が操縦者の特性を理解する事でその性能をより引き出させてくれるというのは有名な話だけど……これほど顕著に表れるモノなのかしら？

でもさっきの声のような……福音(この子)の叫びは、きくと聞きたいと言っていたわ。正確には解らないけど。

「一緒に、飛びましょう」

銀の福音シルバリオ・ユースター「」

(………?)

なにか聞こえた気がした。それも音じゃなくて………なにか、こっ心に直接響いてきたというか、テレパシーみたいなのが。テレパシ-なんてしたこともあるけどもないから、わかんねエけど。

(とにかく、今はあのリヴァイブをどうにかしなきゃな)

バトルフィールドの壁とかはエネルギーバリアーで防御されているので、壁が壊れたりすることは無いのだが、それでもその中にいたリヴァイブは銀の鐘をモロに食らったらしく、大ダメージを受けていた。

(いや強すぎだろ『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘル!!!)

アニメではラスボス的扱いで、原作では第4世代型2機に墜とされたが……ここまでとは思わなかったぞ、軍用IS。

なんかさっき、近接戦に持ち込むと感じたんだが……俺、素人だつて言ったじゃん！でもここで動かなかつたらまた体勢を立てなおされて撃たれるだろうなあ……。痛かつたんだよな、撃たれたりすると。

圧倒的なまでの数のエネルギー弾が、フィールドの中全てを焼き尽くした。
そしてもちろん、その的となった相手のリヴァイブには相当のダメージを与えた。

「（流石は軍用・・・出力がケタ違いね）」

でも油断は禁物。相手もアメリカの優秀な操縦者が搭乗しているわ。現にあれだけの火力の差を見せつけられても、まだ闘いを諦めてはいない。すぐに体勢を立て直し始めている。

この子の性能は、^{スペック}攻撃力だけじゃなく機動力も高かったハズ。今は出力を抑えて通常戦闘仕様にしてあるけど、本来は超高速で動けるほどのスピードがある・・・。

「（ここは近接戦で一気に攻めて、勝負を着けるべきね！）」

ギューーーーーッ!!

「 うそっ!?! 」

私は今起きた現象に、驚く事しかできなかった。

私はただ『一気に近付こう』と思っただけなのに……この子は勝手に、イグニッション・ブースト瞬時加速と間違えるほどの急加速で相手に近付いた。

まだ接近すると命令していないのに、私の判断を上回る速さでこの子は動いた。

「(本当、どこまでも変わった子ね)」

うおおおお。やべえ、今のはヤバかった。

ナターシャさんが近接戦をしようとしたような気がしたから、急加速で近付こうとしたのに……。その急加速が半端ねエ！危うく墜落するところだった。一夏みたいに。

寸前のところで急停止が間に合ったから良いものの、二度とこんな肝を冷やすような事はしたくないね。

（そついや、俺って福音ふくゆいがどれだけの性能を持っているのか知らないんだよな。まあ、表とか見せてもらっても解るとは思えないけど）

え？　なんでだらだらそんなに喋っていられるのかって？

それは、もう戦闘テストが終っちゃったからなんだよな……。

接近中に近接武器がないかと探してただけど・・・オレ福音、武器が翼しかなかったんだよ。刀1本の一夏の気持ちがよく分かるぜ・・・。

だからそこからまたエネルギー弾を乱射して、そのままゴリ押しして戦闘終了。ああ、高火力って素晴らしい。

そういえば、ナターシャさんは俺が突っ込んだ時に（リヴァイブに急加速したこと。べ、別に他の意味なんてないんだからねっ！）ビツクリしてたから、俺の意志が優先される場合もあるって事か・・・。

まだまだ解らないことだらけだな、この状態。

とにかく今日はお終いみたいだし、今後の俺の行方はまさに神のみぞ知るってことだ。

あの神様だけが、な。

第3話（後書き）

神「終わらなかつたね」

「当たり前ですよ。3話で終了ってちょっとした記録ですよソレ」

神「つち。つまんねえの」

「それはそうと、知ってるんですか？この先」

神「そりゃあ神だし」

「ですよー」

神「つーかさ、福音に近接武器無いつてホントなの？」

「知らない事あるじゃん。福音戦では一回も、そういう描写は無かつたんですよ。だから持たせようかとも考えたんですが……やめておきました」

神「コレは今後に大きく影響を与えますね。先は考えてあるの？」

「あと2、3話分は。それから先は……どうしようか？」

神「終りで良くね？」

「せめて10話はやろうよ」

続く

第4話（前書き）

神「なにか言いたい事があるんじゃないのか？」

「この小説書くのがなんだか楽しくなってきたんだけど」

神「あ、そ。でもほどほどにしておけよ？蓮舫の時みたいにクレーム来たら一瞬で消えちまうんだから」

「ですよー。日本の表現の自由はいろいろ制限が付きますから神「それは制限ではなく、プライバシーや名誉に関わる事に関しての当たり前の苦情だな」

「でも蓮舫のはいいだろ別にと思っ」

神「アレは相手がイメージばかりを追求する国会議員だからああなっただ。実際ジブリは113話見て大爆笑してたっけ言うし、面白ければ大概の事は流せられる。ただし今回は相手が悪かっただけ冗談が通じない国会議員相手では結果は目に見えている」

「あれ？なんだか神様キャラ変わってない？」

注） 今回の神様の説明には、一部フィクションが含まれている可能性があります。第3者の情報に惑わされるのではなく、自分でしっかりと調べてから意見を出し合しましょう。1人1人のネットマナーが、多くの人を救えたらいいのにねw

「誰だよコレ……。まあいいや、本編どうぞ」

第4話

転生してから何時間経ったことやら……。

俺は今、ナターシャさんと一緒に（ここ重要！ テストに出るよ！）風呂に入っている。

「なんて羨ましいんだ！ 俺と代われッ！」 「チェーンジッツッ！
！」とお叫びになられている方も大勢いらっしやると思います。

え？ 前話までと口調が違っつて？

ちよつとした賢者になっている今の私には、今の喋りの方がしっ
くりくるのですよハッハッハ。

でもですね、羨ましいというのは浅はかってモンですよ。

(だって、見えないどころか聞こえすらしないんだもの……)

せめて、音だけでも拾ってほしかったッ！ できれば感覚もあってほしかったッ！！

だが現実には悲しいかな。カメラがオフになっているので視界はゼロ。全くの黒。さらに耳が無いから音聞こえないの、テヘッ。

そんななどこの高僧が喜ぶのかわからねえくらい禁欲世界なのだよ、ここは……。

(お願いだ、3分間でいい。誰かこの俺を解放してくれ!!!)

誰も解放してくれませんでしたw 神後でおぼえてる！

(っーか・・・待機状態ってマジで何もする事ねえな・・・。せめてナターシャさんと会話でもできたらなあ)

などと考えながら、俺は何もせず、無為に時間を浪費していた。え？ 一人称が戻ってる？

賢者モードから解放されたんだよ。

で、風呂から出た後俺は眠かったから寝させてもらった。

この状態でも寝るといふ感覚はある。さらに眠気も感じる。不便で仕方が無いと思えるだろうが、これは実際ありがたい。

人間って生物は、寝てないとストレスがたまる。そのストレスの発散先を自分で用意できない今の俺には、眠るといふ事ができるのは嬉しい限りだ。存分に寝かせてもらおう。

目が覚めると、そこはよく分からん場所だった。

「……教会……?」

目の前には見上げるほど大きなパイプオルガンが壁のようにそびえ立ち、横に長いイスが規則的にいくつも並んでいる。

その光景は、まさしく万人が思い描く『教会』だった。キリスト式の。

ってか、俺今喋らなかつたか!?

「あ……あー。本日は晴天なり。じゅげむじゅげむごころのすりきれビッグバンアタック!我が生涯にいつへの悔いな……よっしゃああ!……!」

やっと・・・やっと言葉が話せた！！ おまけに身体もある！ なんて知らんけど甲冑着けてるけど。外せないけど。

「う・・・うーん？」

俺が浮かれ上がっているすぐ近くで、どこかで聞いたことのある声が聞こえた。

（ま、まさか・・・）

「・・・え？ ココは、どこ・・・？」

ナターシャさん来たアアアアアアア！！！！！！

（マジか！？ マジなのかコレ！！ 俺の深層意識が創り出した仮

想空間（夢）じゃないよね！！ 現実だよね！！？）

コレが現実なら・・・今、俺はナターシャさんと2人ツきり！
おまけにここ教会だし！もう死んでもイイ！ あ、もう1回死んで
たんだっけ。でも2回死んでもイイよ、グリーンだよ俺！！

「
ッ！」

刹那、俺の視界は反転し、背中と後頭部を強打する。やっぱり痛み
はあるな。あと抑えつけられているは甲冑のせいで無いけど、身体
が動かないからきつと抑えつけられているってわかる。

（っーか、さっき何があった!?!）

俺が痛みに顔を顰めながら状況を確認する。だが視界が狭く、俺に
何かした犯人を一瞬で見る事はできなかった。

「あなたは誰!? 私をこんな所に連れて、一体どうしようとして
いたの!?!?」

「いや犯人アンタかよ!!!」
声で解った。犯人はナターシャさんだと。

予想外すぎる衝撃的事実に、俺は反射的に起き上がる。その時の力が凄まじかったのか、俺を抑えていたナターシャさんは吹っ飛ばされてしまった。

てかさつき、どういう体位だったんだろう。ひよっとしてすぐくエ口かったりして……。

(いや、そんなこと考えてるヒマないぞ今！ ナターシャさん俺の事すっげー睨んでるもん。敵意丸出したもん)

とにかく、俺の事をわかってもらわないと話が進まねえな……。
何を言ったらいいものか……。

とりあえず、俺が福音だっということから信じてもらおうしかないか。

「あー、ええっと……俺はアンタの持ってる『銀の福音』だ」
シルバリオ・ゴスベル

オイ俺！ もうちょっと言い方他に無かったのか！？ なんかいろいろおかしかったぞ!!

ほら、ナターシャさんも全然信じてくれてな「まさか・・・そんな！」意外とイけそうだ！

「いやホントだつて。教科書とかにも書いてなかった？ 『ISには意識と似たようなものがある』つて。その意識が俺」

「・・・たしかに、それはISに関わる人間なら誰でも知っているわ。でも、あなたがあの子だという証拠が無い」
あの子・・・あ、福音^{オレ}か。

「うーん・・・こんな恰好してうるついでいられると思う？」

やっちまったああああ！！ コレ完全にドボンだよ！
確かに理に適ってるけどコレは無いだろ！ いくら思いつかなかつたつてコレは酷過ぎるだろおおお！！

「そ、そうね・・・。あなたの言う通りだわ」
ほら、ナターシャさんちよつと引いてるよ！ 多分兜みたいな物付けてるからわかんないと思うけど、俺もう涙目だよ！！

「んで たぶん、ここは俺の・・・福音の深層意識みたいな空間だ・・・と思う」

「ちよつと待って！ 思うつてどういう事！？」

「俺だつてさつきまで何も無い真っ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉

しくて混乱してるんだよ!！」

……ってまた恥ずかしい事をおおお!!！」

確かに寝ていたはずの私と同じ空間にいた甲冑の男はこう言った。

「たぶん、ここは俺の……福音の深層意識みたいな空間だ……と思う」
彼は確かに『思う』と言った。ここは彼……あの子（福音）の空間じゃないの？

「ちよつと待って！ 思うってどういう事!？」
私は彼に訊いた。ここでもし的外れな解答や返答に悩むようなら、すぐにでも殺さなければならぬ。

相手は男。ISは使えない。いざとなれば私の持っているこの鐘・
・銀の福音シルバリオ・ゴスペルでこの教会ごと吹き飛ばしてしまえば・・・・。

「俺だつてさつきまで何も無い真つ暗な空間で1人ぼっちでいたんだよ！ そんな時にこんな場所だけど操縦者のアンタと会えて、嬉しくて混乱してるんだよ！！」

彼は確かに言った。私の事を『操縦者』と。

彼は自分の事を福音だと言っていた。そしてその操縦者が私だと言いつつ当たった。

この子・・・・銀の福音は、その全ての情報が国家レベルでの機密とされている。

だから外部の人間が、その事を知っている筈はない。

あの子を開発した研究員なら誰でも知っている。でもそれ以外は・
・大統領ですら、私が操縦者だとは知らない。だから外部の人間が知り得る事なんて有り得ない。

さらに、開発チームは選り抜かれた少人数で構成された。だから顔も声も私はよく知っている。
でも、あんな声を持つ人はいなかった。

「(だとしたら・・・彼は本当にあの子なの・・・?)」
でも、ISの深層意識と対話するには長い年月をかけてお互いを理解し合わないといけない。
なのに、たった数時間搭乗しただけの私の目の前に現れるのが解らなかった。

「(いえ。ISにはまだ私たちには解らない事が多い。こういう現象があってもおかしくは無いハズ・・・それに)」

それに彼は・・・『1人ぼっちだった』と言っていた。

何もない空間で、ただ一人、寂しい思いをして過ごしていたんだと思う。

それに、私に会えて嬉しかったとも言ってくれた。

「(なんだかんだ言っても・・・まだ生まれたばかりの子供なのかもね)」

だったら私が、育ての親になってあげてもいいわよね。

第4話（後書き）

神「まさかの に入りましたね」

「ホントですねー。どうしてこうなったし」

神「あなたが話引き伸ばすために作ったんでしょ？」

「でもここまでとは……。暴走したとしか言いようが無い」

神「それで、これからどういう風に進めて行く気ですか？」

「あと1話か2話こんなカンジの話をして、原作3巻に侵入しようかと考えてます。」

それより、ホントキャラが安定しないよね、きみ」

神「これが本来の私です。でも、それでは10話まで持たないんじゃないですか？」

「一応6巻でも名前だけ出てきてるから……。あ、でも凍結処理されてるから動けないのか。本格的に継続が危ないことに気付いた」

神「また終る終わる詐欺か。いい加減にしたらどうだ」

「イイじゃん別に」

第5話（前書き）

「この前書き後書きの座談会が不評な件について」
神「知らん」

第5話

待機中で使える機能と、使えない機能がある事が徐々にではあるがわかってきた。

まず、外部との接触が全くと言っていいほどできない。音も聞こえなければ周囲を見る事もできない。

あと、この甲冑を強引に引き剥がそうとしたらものすごい痛かった。やっぱりコレ俺の一部だった。痛覚だけある。

それで、中身が多分だけ無い事が分かった。わかりやすく言うならばアルフォンスのような状態だ。

あと、急にここに来たのってなにか理由があるんじゃないかとヒマだったので考えた結果、俺の意識が完全に福音の意識？ を蝕んだという結論に達した。

これもし福音（の意識）が蘇ったりしちゃうたら、どうなっちゃうんだろうね。まさかその為の甲冑とか？ どうせなら剣も付けてくれよ。

（それにしてもヒマだな。なにか起こんねえかな・・・）

ポーッと真っ暗な、あるのかどうかも分からない天井を見上げてた時だった。

一瞬にして視界が変わり、目の前には虎模様のISタイガー・ストライプが浮いている。

(・・・どういう状況?)

私は、変な夢を見た。

ベッドで寝たと思ったら、銀色の甲冑を着た男が騒いでいたので起こされ、起きた場所はどこか知らない大きな教会で、その甲冑の

男の話によると自分は銀の福音で、その教会は自分の深層意識がどうのこうのと言いふらす、常識で考えたらいろいろとおかしな夢。

そして目が覚める直前に、あの甲冑の男は「あんたと会えて嬉しかった」と言っていた……。

という話を、同僚のイーリに相談したら……

「なにそれ気持ち悪っ!!」
即答だった。

「ちょ……ナタル、それきつとストーカーだぞ」

「なんで夢の中にストーカーが現れるのよ……」

「アレだよ、アレ。寝てるナタルの耳元で、そのストーカーがそつと呟くんだよ。で、ナタルは夢でその言葉を」

「それ以上は言わないで！ 蕁麻疹が出る……っ」

私は背筋に寒気がしたが、反射的に耳元を手で隠すようにしていた。

軍の宿舎で寝泊まりしているからと言って、油断はできない。その警備がやってくるかもしれないという、自分でもわかるくらい自意識過剰な疑心暗鬼に陥ってしまった。この目の前のイーリ（バカ）のせいだ。

でも・・・あれは、ただの夢じゃなかった気もしないでもない。そんなあやふやでもやもやした気持ちで、私の心の奥底で燻っている。

「（なにか・・・大事な事を忘れているような・・・）」

あと・・・まるで、誰かが私のすぐ近くにずっといるような気が・・・。

「（ やっぱり、ストーカーかしら・・・？）」

本格的にそっちの線が濃くなってきたので、私はストーカー撃退用の罠を設置しようと考えた時だった。

「おい、ナタル。そいつの実戦テスト、そろそろ始めるんじゃないのか？」

「そっといえばそうね。もう行かなくちゃ」

今日は福音（この子）の実戦でのデータを收拾するためのテストがあるのを、あの夢のせいですっかり忘れていた。

そして数十分後。

私とこの子（福音）は、昨日一緒に闘ったバトルフィールドに
来ている。

「ファイルスさん、準備を始めて下さい」

「了解しました」

研究員の指示に従い、私は銀の福音を身に纏う。

そして私と対峙しているのは……さっきまで私と話していた、
イーリ。

彼女のIS、『ファング・クエイク』は安定性と稼働効率を重点的
に昇華させたバランス型のIS。

「（つまりそれは、長期戦に持ち込まれたら不利ということ）」

さらに今回は、ファング・クエイクのデータも取るために全力で勝

負しろと上からお達しが来ている。できればこの子に勝たせてあげたいのと、イーリに負けたくないという私情も入ってくる。

でも……前回の起動テストみたいに動けなかったら、イーリ相手ではまず勝ち目が無い。

「(ちゃんと、動いてくれるよね……?)」

もし昨日の夢が、夢じゃなかったのだとしたら……

この子はきつと、動いてくれるはず……!

目の前に駆る虎模様のISを、俺は見た事が無かった。

(でも、あの虎模様になにか引つ掛かるんだよね)

詳しいデータが欲しいと俺が思ったとき、視界に詳細な情報がぼこぼこ浮かび上がった。

(なにになに……名称、『ファング・クエイク』。操縦者は『イリス・コーリング』か)

あ、たしか6巻で出てきたナターシャさんの親友だったっけ？

ISの方も第3世代で、エネルギー効率重視型か。

(まだ実戦と言える経験をほとんど積んでいない俺に、米の代表さんの相手が務まるのか？ 答はもちろんノーだ)

けどこっちにもナターシャさんがいる。正直俺のヤル気さえあれば、この人が何とかしてくれるよきつと！

……よし、まずは《銀の鐘》シルバー・ベルで一気にシールドエネルギーを削ってアドバンテージを稼ぐか。

『戦闘を開始して下さい』

ビィィィとアラームが鳴り響き、俺は銀の鐘を発動させようとする。

(あとはナターシャさんが起動させるだけ……)

俺がモーションをイメージした瞬間だった。

ガキィインッ!!

突然、車に撥ねられたような衝撃が俺の身体に伝わった。

第5話（後書き）

「こんなところでなんだけど、PVアクセス4万&ユニーク数8千越えおめでとう!」

神「普通前書きじゃね?」

「いいんだよべつに。あと、この話を読んで『逃げたな』と思っただ方。この展開は初めから考えていた展開ですので、そこだけは間違わないで下さい」

第6話（前書き）

これから座談会失くす方向でお願いします。時短の意味もあります。

あと、この話から主人公のキャラがガラッと変わっていくかもですが、それは徐々に精神がISと同化してきているからです。

第6話

（なんだ・・・！ 何が起こったッ！？）

突然の衝撃に、俺は《銀の鐘》^{シルバー・ベル}の発動をキャンセルさせてしまった。

あの攻撃は、エネルギーを溜める一瞬の時間と、それを全方位に放出するための僅かに上昇しながら回転する行動が必須となる。

後者をしないで発動させた場合、最悪撃つた直後に暴発してその爆風に飲み込まれる恐れがある。

これは全て、先日の試験稼働で一度だけ使った銀の鐘を、ISの計算力とかを手に入れた俺が独自に観察、研究して立てた仮説だ。

そして、さっきの車が電車に撥ねられたような衝撃の正体も、すぐに理解する事ができた。

その正体とは 相手の打撃。それも、超高速の拳によるものだ。

俺の頭の中では、どうやってそこまでの加速を一瞬にして可能にさせたのかという思考に入っていた。そして、その答は一つしかない。

(間違いねエ……イグニッション・ブースト瞬時加速だ……！)

あの機体……『ファング・クエイク』はスラスタが4基あつて、その4基を個別に瞬時加速させる『リポルバー・イグニッション・ブースト個別連続瞬時加速』を使えたはずだ。

この距離でそのスラスタの2基を使ってそれを行つたとしたら、銀の鐘の攻撃直前の隙をつくまでもなく、人の視覚による反射神経を遥かに凌駕するスピードで接近できるだろう。そこに掛かるGは、ISが相殺してくれるからな。

多分、イリスさんは戦闘開始直前までブースターにエネルギーを溜め続け、エネルギー充電を半ば無効にした形で強襲してきたのだろう。

(にしても……どこが『安定性と稼働効率を重視した機体』だよ！
どこからどう見ても超高機動型だろうがッ！)

いや……愚痴ってる余裕は全く無いぞ。こちとらまだまともに戦った事が1回も無いんだからな。

(クソッ……考えるッ！ どうやって戦えばあの機動力を封殺できる!?)

……
いや、違う。

機動力を抑えるとか、重要なのはそんな事じゃねエ。

(
本当に重要なのは、どうやって『勝つか』だろうがッ
!!--)

「つく……まさか、出だしから切札を使ってくるとは思わなかったわ」

『ナタル相手だと、こつちも手加減とかできないんでないーの音がオープン・チャンネルから私の耳に入る。』

でも、私の頭の中ではイーリとの会話とは別に、さっき突然銀の鐘の発動アイコンが出てきたのかをずっと考えていた。

「（やっぱり……私の意志だけじゃない、もう一つの何かも福音に影響を及ぼしている気がする……）。
そう考えるのならば、昨日見た夢は本当だったことに……うっ
ん、まだよ。まだ結論を出すには早すぎるわ）」

まだ私には……銀の福音（この子）の事が、何一つわかっていないのだから……。

『ほらほら！　ボーっとしてるんだったらこっちから行かせてもら
うぜエ！？』

イーリの声に、私は今彼女と戦っているのだと再認識させられた。

「（そう……今はデータ収集目的と言っても、ISによる戦闘中……。余計な事を考えてるヒマは、操縦者の私には一瞬たりとも在りはしない）」

イーリの駆るファング・クエイクが、今度もまた一瞬で私を間合いに捉えた。
でも今回はただの瞬時加速だったみたいで、さっきほどの速さは無かった。

「（このタイミングなら間に合う！）」

私は福音の多方向推進装置マルチスラスターの砲門を前方に向け、エネルギー弾を発射する事でフアング・クエイクを迎撃する。

でもそれはイーリも承知の上だったらしく、主武装メインウェポンのその拳でエネルギー弾を弾きながら殴ってくる。

「相変わらず……ムチャクチャね、あなた」

『日本には【無茶が通れが道理も引つ込む】って諺があるんだぜ、ナタル！』

イーリはいつエネルギーを溜めたのか、リボルバー・イグニッション・ブリストも個別連続瞬時加速で追討ちを仕掛けてくる。

私は回避を試みるけど、思うように福音が動いてくれないから防戦一方だった。

それでも昨日の試験稼働よりは数段動きやすくなっていたのは、私にとってせめてもの救いだった。

シールドエネルギーの残量は、残り186……。

「（ここで反撃をしないと、勝ち目は完全に無くなってしまっ

「！）」

『んおっ!?!』

私はイーリの拳を両腕で掴み、まるで羽を広げるクジヤクのように、福音の翼を大きく開き、エネルギー弾を撃ち放った。

そしてさっきのお返しと言わんばかりの蹴りを、イーリの腹に浴びせて距離を取る。

『やっぱりやるなあ、ナタルは』

それでも、その直撃を受けたはずのファング・クエイクはダメージは受けているようではあったが悠然と宙に浮いていた。

「（もしかして出力が低下してるの……!?! でもそんな警告は出てないし……）」

やっぱり、この子は他のISとは、決定的な何かが違う。でも、そんな事より……

「（イーリに……負けたくないッ!）」

（あゝ、くそつたれが！ 人の事ボコス力殴りやがって！ 攻撃当たると痛エんだぞこっちは！）

さっきの連続攻撃だって、ナターシャさんがどうにかしてくれなかったら腕が折れてたかもしれないぞ！ 責任とれるのか！？

それと、防御力高すぎるだろ。なんでエネルギー弾をモロに受けて、さらには蹴りも食らってそんな何事もなかったかのように佇んでるんだよ。心折れるだろ。

（つーかこれ、俺がナターシャさんの足を引っ張ってるからじゃないのか？）

俺が弱音を吐き始めたのと同時に

『今度もこっちから行かせてもらうぜツ!!?』
イーリスさんは身体をかがめ、瞬時加速の構えを取る。

マズいッ！ 今度またあの連撃を食らったら、残りのシ
ールド・エネルギーじゃ持ち堪えられないッ！！

畜生・・・これじゃあ、俺のせいで負けちまうじゃねえか！

(・・・ 負けたく、ねエ ツ！)

イーリスさんは個別連続瞬時加速リポルター・イグニッション・ブーストで俺に向かって突進んでくるのがわかる。

だが、これは俺がISのハイパーセンサーで直接確認できている映像だ。ナターシャさんはここからさらに、目から脳に、そして筋肉へと情報を伝達させなければならない。

つまり

人間の反応速度では、間に合っはすが・・・無い

・・・

ハズだった。

ガキイイーン！！！！

金属音がバトルフィールド中に響き渡った。

だがその硬質で無機質な音は、福音からではない。

『そんな……有り得ない……私の攻撃に、反応できるだなんて……!』

イリスさんの乗るIS、ファング・クエイクが、福音……つまり、俺に殴られた事による音だった。

(いや、驚いてるヒマは無い。すぐに追撃して少しでもダメージを与えないと……!)

ズダダダダダ!!

羽ばたくようにエネルギー弾を浴びせ、俺は一度後ろに下がる。

(今までと感覚が違う……!?! 次に何をすべきかが一瞬で解るような)

その時、俺は気付いた。

気付いたのに理由なんてない。理論もない。だがそれでも、理解した。この決定的で絶対的な変化に。

(わかる……ナターシャさんが何をしたいかが、全て
!!!)

第6話（後書き）

祝！ 7万PVアクセス&1万3千ユニークアクセス突破！！

第7話（前書き）

第7話です。お待たせしました。

第7話

「（どういづこと!？ さっきまでと反応速度が全然違う・・・!!）
」

視界が一瞬でより鮮明なものへと変化したと思ったら、身体が軽く
なったような感覚がした。

いままでであった『ぎこちなさ』も完全に無くなっていた。むしろ、
より動く。

「（行ける・・・！ このこの子となら、相手が誰でも負ける気が
しない!!）」

私は心の底から溢れてくる高揚感をギリギリのところまで抑えながら、
目の前にいるイーリを見据えた。

『おいおいナタル、手を抜いて油断させるなんて卑怯だぞ！』
プライベート・チャンネルからイーリの声が聞こえた。

「手加減していたつもりは無いわ。私はいつでも本気よ」
私はイーリにそれだけ言って、スラスターを使った急加速で接近し、
ファンング・クエイクの胸部装甲の部分にスピードを乗せた渾身の蹴
りを食らわせる。

そして吹っ飛ばされたイーリの背中に回り込んで、背中に胴回し蹴りを浴びせて宙に舞い上げる。PICを使って姿勢を維持し、翼にある銃口を全てイーリに向ける。

ズダダダダダダダ

ツ!!!

放たれた羽のようなエネルギー弾の多くに手応えを感じた。

そして同時に、この子の性能の高さを思い知らされた。

「（こんな超次元的な戦闘を可能にすることができると、夢にも思わなかったわ）」

そしてこの運動性には……きつと、あの子が関係している。

煙幕の中に立つファング・クエイクを確認した時、俺は少しだけ戦慄した。

さっきのドラゴンボールのような連続技をモロに食らって、まだ立っ
ていられる事に俺は若干の恐怖心を抱いたからだ。

(でも・・・なんだろう、この安心感は)

まるで母親に護られているような、それに似た安心感が俺を包み込
んでくれていた。

でも、ここらで勝負を着けたいな……。そろそろ身体の痛みがキ
ツくなってきた。

(《銀の鐘》^{シルバー・ベル}……アレで決めるしかない)

俺は《銀の鐘》の発動モーションを取り始めたが

ボウツ と爆煙を押しつけ、ファング・クエイクが俺に凄
まじい速さで突進んでくる。

だが……見える。その姿が、しっかりと！

俺は個別連続瞬間加速で突撃していたファング・クエイクの拳を、
リボルバー・イグニッション・ブレスト
まずあえて左肩の装甲に当てる。

だが衝撃を後方に流すように身体を回し、その時に受けたエネルギーを回転する力に変換する。

(コイツで……最期だ!！)

「こちらが福音の戦闘データです」

「ご苦労」

女性研究員に書類を受け取った初老近い男性の研究員は、パラパラと書類をめくってあるページをじっと見つめていた。

そのページにあったのは、戦闘時の福音の稼働率。

そのグラフを見ると、初めは10パーセントにも満たなかったのに、戦闘の終盤には95パーセントを超えていた。

少なくとも、彼はここまでの稼働率を見た事が無かった。それほどまでに、その数字は異常だったのだ。

77

「操縦者とISの同調^{シンクロ}・・・面白い」

男は1人、静かにそう呟いた。その言葉には、福音の【兵器】としての可能性を見出していたのが覗えた。

第8話（前書き）

ども、おひさしぶりです。更新が滞ってしまって申し訳ありません。

第8話

(寝たい……)

俺は今、それだけを考えてただただ無意味に時間を浪費している。

前にも同じことを言った気がするが、人間は眠らなければストレスが溜まり、イライラしてしまうのだ。そして俺はこの福音になっちまった時から、一睡もしてない。これがどういう意味かわかるか？

とにかく、俺は一度ぐっすり寝て、清々しい目覚めを味わいたいのだ。できればあの何物にも代えられない、布団の温かさも感じたい。

だが現状はどうだ？ 眠気はあれ以来一度もこないし、そもそも肉体のようなものはあっても横になっただら床が冷たいし、何より寝にくい。ちなみに布団も無い。あるのは感触と虚無感だけだ。

何？ 何も無いがある？ バカ言っな。結局なにもねえじゃねえか、このハムスターが。

ああ、言い忘れていたが今の状況はあの教会のようなんだっ広い空間だ。そこでたった1人、大の字になってる中世の騎士っぽい甲冑が俺。何も知らない人が来たら不審者扱いされる事間違いない。前にナターシャさんがキモがるより先に攻撃してきたのは、あの人

がISの国家代表操縦者だからと勝手な解釈をさせてもらおう。ラウラもきつと同じ事してるって。ああいう状況なら。

などと色々考えて時間を潰しつつ、ナターシャさんが寝てこっちに来るのをだらだらと待っているつもりだったのだが、その夜はぼっちで過ごした。

ISのコアネットワークをフル活用して、何とか時計機能を使えるようになったのは俺にとって非常に大きい。せめて時間くらいは知りたい。人間は時間を感じられる唯一の動物だと、どこかの哲学者が言ってた気がするし。

なんでナターシャさんが来なかったのかは………今から考えるか。

あの変な夢は、今日は見ることがなかった。

もしかしたら、あっちに行くには何か特別な条件が必要なかもしれない。

「（まだまだチャンス機会はあるわけだし、焦らないでも大丈夫よね）」

色々と聞きたい事はあるけれど、それは次に会ったときになっちゃったわね。

私はベッドから出た後、一度シャワーを浴びてから食堂に出向いた。

島を丸1つ使っているこの軍事研究施設に滞在している軍人と、ここで働いている研究者たち。そして私やイーリのようなISの操縦者は、それぞれ専用の食堂で食べる。

ただ、私たちの方は他の2つとは明らかに違う。

どの国もEISの機関にはやり過ぎなほどに資金を出しているから、
そう考えると当然なのかもしれないけど………

「（照明がシャンデリアになってて、6人分しか椅子がないこの部屋を、本当に食堂と言えるのかしら？）」

どちらかと言えば、ここはもう一流のレストランという表現の方が適切だと思う。

そして何より、ここを6人で使っているところを私は見たことがない。設計者は一体どんな要望を受けたのだろうか。

「ナタル〜！ こっち来いよ〜！」

……そんな事を考えているのは、どうやら私だけのようね……
。。。

「それで、あのストーリーカーは来たのか？」

「もうその話はいいわ」

私はパンをちぎりながらイーリに答えた。

「あ、そ。ところでナタルさあ、今日は超音速下の試験稼働だろ？
テストパイロットは面倒くさい仕事多いよな」

「別に私は、面倒とか思わないけど」

「ふーん。ま、私もモニター越しに見学させてもらうことにするぜ」

「どうぞお好きに」

いつもと同じように、私とイーリは朝ごはんを食べた。

でも、普段通りだったのはそこまでだった

。

第8話（後書き）

最近短いですが、今年中にあと1話は投稿したいですね。

第9話（前書き）

長い間お待たせしました

【I S 』に『く】今年初の投稿です

第9話

なんとなくホームシックにならない事に自惚れ始めていた瞬間、出撃する事となってしまった。

いや、出撃という表現はやや大袈裟かもしれない。ただ単に基地の外に射出されただけなのだから。エヴァの真上へ飛び出すカタパルト？ みたいなカンジで、パシユウって。

で、上空何百メートルかはよく分からないが、とにかく見晴らしのいいこと。足下に広がるは海。そして緑豊かな島々が点々としている。少し遠くを見てみれば、観光地のようなビーチで大勢の人がこれでもかと言うほどバカンスを満喫している。

そんな光景を目の当たりにされては、嫉妬と妬みしか浮かび上がって来ない。今の俺なんてあるのが痛覚だけなんだから、水に入った気持ちよさなんて分かるはずもないんだから。

とりあえず、今俺とナターシャさんはどこに飛んでいるのかを確認するが……ここって、ハワイの近くじゃね？

この時、俺は奇跡的に随分前に見たISのアニメで「ハワイ沖」という単語を耳にしたような気がしないでもないと思い始めた。それはどこだったかと記憶を探っている時、「飛べ」と指令が下った。

いや、「飛べ」と本当に言われたんじゃない。なにやら超音速飛行がうんたらこうたらと言っていた。

何かなんだかよくわからない俺は、とにかく早く動けばいいのだからかと頭から生えた多方向推進翼マルチスラスターを後方に向けて最高出力で吹かす。

バシユウウウン！！

(痛い痛い痛い痛い！！！！)

一瞬でさっきいた場所から遙か彼方へと移動していた俺は、ソニックブームで生じる衝撃を身体全体で感じていた。

いや、これは酷いだろ！　あまりにも過酷過ぎるぞ！　なんで動くだけでこんな苦痛を味あわねばならんだ！　ちよつとした拷問と同じだぞ！

……ピピピ

本部から命令が送られてきたようだ。内容は
の最大火力の計測……、か。

《シルバール・ベル銀の鐘》

いつものようにやればいいのだろう。俺はすぐに《銀の鐘》のモーションを取り始める。

ズダダダダダダ！！

放たれた《銀の鐘》は、威力と呼べるものが昨日までと段違いだった。

着弾した海面からは巨大な水飛沫が立ち昇り、そのエネルギーの大ききさからか海水が蒸発している。

これをモロに受けたら、量産機なんて1発だろう。

俺が米軍の本気さに若干引いている時、コアネットワークから直接何かのプログラムが送られてきた。

(なんだ、これ?)

『それ使って、ちゃっちゃと指定する座標に飛んできてね』

なぜだか、言葉と呼べるものが聞こえた気がした。が、ナターシャさんには聞こえていない様子だ。

そして、あの呆けたような声……間違いない。

篠ノ之束様だ。

今の俺にとって、母と言ってもいいんじゃないかと思える

【天災】こと篠ノ之博士。一夏曰く【狡猾な羊】。

そっぴや、ハワイ沖って福音が暴走した時にいた場所じゃなかったっけ。

と言う事は、このプログラムは福音を暴走させる物だったことか？

ふと、このまま原作を崩壊させてやったらどうなるかが
気になってしまった。

俺が出向いてやらないと、一夏の白式は第2形態にならない……と
思う。しばらくは、だが。

まあでも、それだと普通に幕の誕生日を祝えて、一夏も意識不明に
なりはしないんだし……別にいいんじゃないかね？

俺も凍結なんてご免だし、ファントムタスク亡国機業もほつといたら自爆するんじゃない
かね？ 世界各国にケンカ売ってるわけなんだから。

ま、ISを使った傭兵として自分を売り込むんだったら話は別だけ
ど。

とにかく、俺はこの命令を全力で無視する事をここに誓います！

同時刻　　IS学園臨海学校近辺にて

福音のコアに直接的なアプローチを仕掛けた女性　　篠ノ之束
は、自分が今日の当たりになっている事象に対して興味を持っていた。

ISのコアは、現在存在する468個全てが彼女によって制作されたものだ。

言ってみれば、全てのISは彼女の子供だとも表現できる。

………そんな子供の1つが、母であるはずの自分を【裏切った】のだ。

先程、福音に送った自律行動システムの作動が感知されなかった。天才である彼女が、送信を間違えたりするはずはない。他に考えられる彼女のミスは無い。では、なぜ現実には彼女の思う通りに運ばなかったのか。

彼女は1つの答を出した。

【コアに存在する自意識が、自ら考え、自ら判断し行動した】

それこそが、天才の導きだした答だった。

「そつちがその気なら、こつちにも考えがあるよ」

天災とあだ名される彼女が……………その鋭すぎる牙を剥いた瞬間だった。

第9話（後書き）

次回は日曜までに書き上げます

第10話

私はいつもと変わったことなど何も無く、時速にして2000キロ以上の速さで真っ青に晴れ渡った空の下を飛び回り、指示された通り《銀の鐘》シルバークロウを最大出力で撃ち放った。

その火力は、陸で行えばおそらく地図を書き換えなければならないだろう程の威力だった。

「（軍用IS……ここまでする必要があるのね……）」

ISのコアは、その数が限られている。

なので、1機で如何に多くの敵ISを撃墜できるか、如何に強大なISを倒せるかがそのISの価値とされている。

ISを倒せるのはISだけ。それが世界の条理である限り、世界はきつとより強いISを作り続ける。

そして、世界の抑止力であり続けなければならないアメリカが生み

だしたのが、この子。

近い未来、ISを使った戦争が起こるかもしれない。もしそうならこの子は、望まない争いに投じられ、人の勝手で闘わされ、人の都合で人を殺す。

それが、【軍用IS】の辿る末路。

不憫だと思う。ただ人を殺す道具として生まれたこの子が。だからと言って、一介の操縦者でしかない私には何もしてやれない。

だから私にできるのは、祈ることくらいしかない。

この子が最期を迎えるまで、戦争が起こらない事を。

でも、その【最期】は呆気ない程にすぐ訪れる。

他でもない、私のせいで

。

ISのハイパーセンサーで、どこまで遠くを見渡せるかを実験していた時だった。

アメリカ本土まで拡大して見えたと思ったら、またコア・ネットワークから束様によるメッセージが届いていた。

が、その理由はすぐ明らかとなった。

『警告 血圧、心拍数が危険水準に達しました』

『警告 操縦者への生命維持が困難な状況にあります』

次々と浮かび上がる【警告】の文字。真っ赤に染まる周囲の映像。突然の事態に戸惑う研究員の声。

そしてなにより、見えない苦痛に悶え苦しむナターシャさんの叫び。

俺は、それらによって一気に追い詰められていった。

が、ナターシャさんの悲鳴がぶつつりと消えてしまった。しかし、ナターシャさんはピクリともしなかった。

それが逆に、俺の焦りを加速させる。

そして何を思ったのか、さっき来たメッセージを開く。

『やつほく、篠ノ之束だよ！ 突然でなんだけど、束さん的には一刻も早くこっちに来てほしいんだよね。だから、こっちからちゃち

やっと操作して操縦者さんの脳を破壊するプログラムを始動させちゃいました！ 早くしないと操縦者さん死んじゃうよ？ 束さんの言う事を聞いてる間は停止させておくから、なるべく早くこっちに来てね。ちなみに、このプログラムはシールドエネルギーとは別のエネルギー系統に接続されてるから、そっちのが無くなっちゃったら止まっちゃいます。でも、今はまだウォーミング中だけど本気出したら大体5分で死んじゃうから気をつけてね！ それと、そっちのエネルギーが切れるよりも先にシールドエネルギーの方が無くなっちゃったら操縦者さんも死にます！ 気をつけてね。』

そのメッセージを見た瞬間、背筋が凍るようだった。

ナターシャさんが、死ぬ？ 冗談じゃない。なんでそんな事にならなきゃいけないんだ。

そもそも、俺がちゃんと原作のエピソードを守って動いていたら、こんな事になりはしなかったんじゃないか？

そつだ。きつとそつに違いない。俺のせいで、ナターシャさんが死にかけてるんだ！ 俺の……俺のせいで……！！

（ちつくしよおおオオおお……！！！！）

俺はすぐさま、1通目に添付されていた自律行動プログラムを起動させ、福音のコントロールを得る。

そろそろ5分が経つ。ウォーミングとやらももうそろそろ終るはずだろう。つまり、タイム・リミットはあと5分。たったそれだけの時間で満タンにされた全てのエネルギーを放出するのは不可能だ。

(従っしかない…… ナターシャさんを、救うためには)

俺は、決意を固めた。

一夏たちと闘い、凍結処分されることを

！

俺はとにかく、指定された場所に向かって全速力で飛んだ。

マツハ7以上の速さで飛ぶ俺の身体には、ソニックブームにより信じられないほどの痛みを伴うが、そんなことは考えなかった。

【痛み】は耐えられる。特に俺の場合、痛いだけで死にはしない。死にさえしなければ何度でもまたこの空を飛べる。見れる。感動できる。

まあ、五感はIS展開時だけ視覚、聴覚、触覚の3つ。おまけに触覚は痛覚しか残されてないって地獄だけだな。

これでかなり優遇されてるだろうから、普通に死んだらどうなるのかなんざ知りもしなければ知りたくもない。

俺は1度死んだ。人が死ぬ理由も知っている。下らねえ理由で寿命が削られ、死神がどっかからやってきて、身勝手に命を狩り取っていく。

だが、俺はそんな悪魔のようなヤツらから4年も逃げてきたんだ！死ぬことは、回避できるんだと証明されている！

だから、逃げ延びさせてみせる。死神が来ようが、あのクソ神が手を下そうが

（俺は、ナターシャさんを死なせたりしねえッ！！）

これが自己満足だっていうのは百も承知だ。

死なせたくないと言うのはただの詭弁で、本当は他人の事なんてどうでもいいんじゃないのか？ただ単に流されてるだけなんじゃないのか？

そんなしみつたれた理屈はどうだっていい！

理由なんざ二の次でいい！ 終わった後に考える！ とにかく今は行動しろ！ それこそが最善だ！！ なんと言われようが関係ねえ！
俺は絶対、救ってみせる！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4278z/>

IS『に』転生ってふざけんな！

2012年1月8日02時46分発行